

大臨評 11.4
の示したもの

総評、この危機と混迷をいかにうち破るのか

三里塚・ジェット闘争貫徹ノ「国鉄35万人体制」粉碎ノ

三里塚二期決戦の爆発こそが、右翼労戦「統一」をうちくだく道

右翼的労戦「統一」同盟・JCへの完全屈服Ⅱ「統一準備会」への参加を決定するために召集された注目の第六回総評臨時大会（11月4日、九段会館）は、しかしながら、会場内外にあふれた右翼的労戦「統一」反対ノVの労働者の怒りと弾劾の中で、総評執行部の「統一準備会」にそろって参加となる反動的方針を強行する事ができず、「執行部案」も「修正案」も共に採決せず、後日の拡大評議員会にもちこすという異例の閉幕となった。

今や総評労働運動は結成以来最大の危機と正念場を迎えた。しかし、この危機と混迷をつき破って、職場で、地域で怒りをこめた活性化と流動化も又急激にまき起っている。動労千葉は、この日、青年部を中心に総評大会会場前で代議員・傍聴者への「右翼労戦「統一」粉碎へのアピール」のビラまきを堂々と貫徹し、「統一推進会」・「基本構想」粉碎ノ 労戦「統一」絶対反対ノ 闘う総評の旗を守れノ 三里塚Ⅱ反戦闘争の爆発で、総評解体Ⅱ産報化への攻撃をうち破ろうノ 動労千葉主催、12・3全国労働者集会に結集し、共に決起しようノ」と訴え、大きな注目と共感をつくり出した。

11・4 総評臨大に至る経過

「日刊動労千葉」連載中の「右翼労働戦線「統一」問題を考える」でも明らかな通り、労戦「統一」の母体は、総評労働運動の破壊を執ように統制してきた同盟副会長Ⅱ自動車総連会長・塩路一郎らで構成される「統一推進会」である。

この「統一推進会」は、総評指導部の了解・合意のもと、昨年9月30日発足し、本年6月3日、「民間先行による労働戦線統一の『基本構想』」を発表した。そして、年内Vに「統一準備会」を発足させ、「新たな協議会の発足」を一九八二年とする方向を確認したのである。（※その後、本年12月14日、と決定された。）

これを受けて、7月総評定期大会は、統一推進会の「基本構想」に対し、これを認めた上で「五項目の補強見解」をもって各単産の一致した対応を確認したが、戦線「統一」に関する部分のみ結論をもちこして来ていたものである。

総評解体Ⅱ産業報国会化を許すな

今日の労戦「統一」問題の核心点は、JC・同盟をはじめとする民間大単産の名だたる右翼的、反動的幹部や労働貴族を尖兵とした、支配者階級による八総評労働運動の右からの解体の攻撃Vという点である。もし、この攻撃を許すならば、労働組合は完全な労資協調と企業防衛主義に染め上げられ、再び三たび侵略戦争へとかり立てられて行ってしまうだろう。つまり、あの鉄労と一緒になることであり、組合の大会に日の丸を掲げて社長訓辞を受ける日産労組のような「組合ならざる組合」へと変質させられるのである。

にもかかわらず、横枝議長―富塚事務局長に代表される総評指導部は、敵のこの大攻撃に対して毅然として対決するどころか、逆に「大筋において

て理解する」などと屈服してしまっている。そして「五項目補強見解」が何ら歯止めにならず、完全に無力であるにもかかわらず、「統一準備会」の一括参加」を表明したのである。

富塚路線の尖兵Ⅱ「本部」反動分子弾劾ノ

一方、動労「本部」革マル反動分子は、これまでに「右翼労戦統一に歯止めをかけた七月総評大会」「五項目の富塚路線は大勝利だった」などとさかんに美化してきたが、10・20集会や総評臨時大会で富塚路線の防衛隊を買って出るなど、「統一準備会」への一括参加」路線の押しつけをもってする労戦「統一」攻撃の尖兵としていよいよはつきりとその本性を表わしたのである。それは総評臨大で配布された動労「本部」名のビラを見れば明らかで、彼らは労戦「統一」反対の言葉すら全て引きおろして「全的統一を」「富塚路線の下で団結すべきとき」と言いなち、又、同時にまかれた革マル反動分子のビラにはもつとはつきりと、労戦「統一」に反対する部分に対して「権力内の謀略推進派が総評にもぐり込ませた分裂主義者・挑発者」「労戦統一反対を掲げて総評を分裂させるこれらの部分を粉碎せよ」とまで公然と言いつけているのである。

こうした戦闘的労働運動の破壊者Ⅱ告訴路線への転落者Ⅱ国鉄35万体制の推進者Ⅱ右翼労戦「統一」の尖兵Ⅱ動労「本部」革マル反動分子を追放・一掃し、動労大改革を一刻も早くかちとらねばならない。動労千葉は、あくまで81・3ジェット決戦の偉大な地平を堅持し、「三里塚を闘う労働運動」を発展させ、来春三月二期着工粉砕闘争の大爆発をもって、この攻撃をうち破り前進する決意である。その事が、日本労働運動の戦闘的再生をかちとり、右翼労戦「統一」を粉碎する唯一の正しい道なのである。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよノ